

共振する心

奨励	菅根 信彦〔すがね・のぶひこ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団神戸教会牧師 いずみ幼稚園・石井幼稚園園長 同志社大学神学部嘱託講師

さて、ここに十二年間も出血の止まらない女がいた。多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。「この方の服にでも触れればいやしていただける」と思ったからである。すると、すぐ出血が全く止まって病気がいやされたことを体を感じた。イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、「わたしの服に触れたのはだれか」と言われた。そこで、弟子たちは言った。「群衆があなたに押し迫っているのがお分かりでしょう。それなのに、『だれがわたしに触れたのか』とおっしゃるのですか。」しかし、イエスは、触れた者を見つけようと、辺りを見回しておられた。女は自分の身に起こったことを知って恐ろしくなり、震えながら進み出てひれ伏し、すべてをありのまま話した。イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らなさい。」

(マルコによる福音書 5章25―34節)

「おはよう」の挨拶から

私の働く神戸教会には二つの小さな付属幼稚園があります。一つは、教会の横、まさに都市の真ん中にある「いずみ幼稚園」、もう一つは、教会から車で7～8分のところにある、兵庫区の「石井幼稚園」で、閑静な昔ながらの住宅街に位置します。私はそちらの園長も兼務しています。両園とも入園式の数日後に行われる「父母の会（保護者会）の総会」で『幼稚園の生活指針』というものを提示しています。以前はそのような指針は必要なかったのですが、4～5年前から出すようになりました。基本的な生活習慣の指導や3歳までにしておくべきしつけができなくなっているからです。「おはようございます」「ありがとう」「いただきます」の挨拶奨励から始まり、各家庭でも挨拶を交わして欲しいと言います。また、早寝早起きや朝食をとること、さらに、「自分でカバンをもって登園すること」などを指導し、また「しっかり自分の足で歩いて登園してください」とも伝えています。

毎朝、どちらかの幼稚園の門に、主任や副園長と立ってお迎えをしています、「おはようございます」と言っても応えてくれない子どもがいます。特に、都市の中心部、マンションで暮らす子どもたちが多い教会横の幼稚園児は、挨拶が少ないのが特徴です。そもそも親御さんの挨拶が少ないと言ってもよいでしょう。ときには、挨拶しない子どもの肩を掴まえては、目を離さずに「おはよう」と言います。すると、小さな声で「おはよう」とようやく言ってくれます。それもまた、悲しいことです。あるとき、ある書物から、「自分の語る言葉が自分の身を裂くように語っているか」、「本当に気持ちを入れて言葉を発しているか」、「身を一步踏み込んだ言葉として語っているか」との問いを受けました。挨拶する子どもの問題ではなく、声をかける私の問題として、私は本当に子どもに対して身を入れて語りかけているか、つまり、「今日、君に会えてよかった」「今日ある命や出会いを喜ぼう」との思いをもって、「おはよう」と挨拶していたのかが問われているということです。園長先生として、「挨拶は大事だ」という程度では言葉は通じない。むしろ、子どもは大人の心を見透かしているとも思いました。翌日から、門に入る子どもに「今日、命が与えられて、元気な君と会えてよかった」との思いをもって挨拶をするようにしました。すると、今まで見向きもしてくれなかった園児が、全員ではありませんが、挨拶するようになりました。そして同時に、「挨拶しない子」「できない子」の姿にも「今日はこれでもいいのだ」、「明日また思いを伝えよう」と思うことができるようになりました。ふと、教会の礼拝も同じだと思いました。日曜日ごとに集う方々と、本当に牧師として、心から「今日、あなたに会えて、時間と空間を同じくして、神様を賛美できる」ということをどれだけの喜びとして、受けとめて出会っているか、礼拝を共にしているか、交わりを厚くしているかということを自省させられました。言葉は単なる伝達手段ではなく、命をもつもの、心を響き合わせるものであり、心が共振するような言葉こそ、人を生かすものだと思い直しました。

信仰とは何か

本日選びました聖書箇所は、マルコによる福音書5章後半にある「イエスの服に触れる女の物語」です。病気を癒すイエスの奇跡物語です。

そして、この物語の結論は34節の「イエスは言われた。『娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心していきなさい』」との言葉です。イエスへの信頼、そしてイエスへ委ねる思い、そこに癒しという救いがあったことを強調しようとしているように思えます。つまり、イエスへの「全き、信頼」がポイントです。「信仰」とは何かということを明瞭にした物語です。

「あなたの信仰があなたを救う」あるいは「信じなさい」という言葉は、教義・ドグマ・キリスト教の教えを信じるという狭い意味ではなく、イエスに対し、その言葉や振る舞いをも含めた人格や、存在に対する「信頼」が求められているということです。「信仰」をさすギリシア語は「ピスティス」。これは「信頼」という意味をもっています。34節は「あなたの信頼があなたを救った」とも訳すことができます。しかも「癒す」ではなく、「救う」という言葉を用いられているように、「信頼」することによって、病気が癒されたのではなく、病気やそれにまつわる様々な偏見や疎外を含めた、全人的解放がなされていくことが表現されています。

「病気」のもつメタファー

さて、12年間も出血が止まらない女は、聖書に説明されているように、多くの医者にかかり、過酷な苦しみを受け、しかも治らず、全財産を遣い果たしてしまったということです。当時の律法では、体内から出るものはすべてが不浄なものです。その細かい規定については旧約聖書のレビ記15章に克明に記されています。聖書学者によれば、古代イスラエルより、血液は体内にあるときは命の源として理解され、清いものとして受けとめられてきました。しかし、外に出るとき汚れたものとなる。このように、当時のユダヤ教社会は、浄と不浄の明確な境界線が敷かれ、事柄の善悪、救いの有無までが線引きされる時代であったということです。つまり、病を負うということは、病の苦しみだけでなく、理不尽な差別があったためこの女性は、全財産をほどこしても、この病気の苦悩に加えて、不浄のレッテルを貼られ続けて生きられなかったということです。

すなわち、この女性は、社会から12年間完全に疎外され、遮断されて生きてきたのです。「病気」という言葉は、ギリシア語で「マスティクス」と言います。この言葉は、元々「鞭打ち」「苦悩」「苦痛」を表します。それは単なる「病気」ではなく、それに付随した社会的苦悩・孤立・不安・孤独を含めた言葉でした。それが、「病気」のもつメタファー（隠喩）です。イエスの時代、病気をもった人は、病気そのものの苦しみのほか、他者からは神の罰と受けとめられて人格さえも否定され、社会的に疎外されました。さらに、そのために自分のことを自分で責め続ける、という幾重もの苦難を作り上げていったのです。その意味からもこの12年間病んだ女性の苦悩と孤独は相当につらいものがあつたはずです。

だからこそ、この女性はイエスにすがります。そんな切実な思いのなかで、おそらく、群衆に紛れ込んで、せめて、イエスの服にでも触れようとしたのです。当時の律法によるタブーを超えて、イエスに出会おうとした、その気持ちが28節の「この方の服にでも触れればいやしていただける」との言葉になって表現されています。

感覚と言葉

実は、この物語のなかで、私の一番心に残る描写は、30節のイエスの「感覚」と「言葉」です。この女性がイエスの服に触れたとき、「すぐ出血が全く止まって病気がいやされた」と29節にあります。そして、30節では、イエスはすくんに「自分の内から力が出て行ったことに気づいた」と描写されています。イエスは、女性の行為、つまり、「服に触れた」出来事を理解し、誰であるかを捜し始めるのです。弟子たちは、「群衆がイエスに押し迫っている」としか見えなかったようですが、イエスは違いました。30節後半で、イエスは「わたしの服に触れたのはだれか」と言います。

「感じた」とは、「知る」という言葉と同じ語源をもちます。人間の感覚を介して認知する言葉です。その病気で苦しむ女性の苦悩を、イエスも自分の力が抜けるほどに感じ共鳴したという意味です。女性の苦悩をイエスもまた感じて「力が出て行った」、心が共に震えたということです。

この物語は、言葉だけで「奇跡が起こった」ということではないのです。そこには、何とかイエスにすがろうとした女性の必死な思い、イエスの服に触れるという行為、そして、力が抜けるほどイエスもその痛みを負っていく。そのような、「感覚の相互性」、「共振する心の響き」があるのです。

マルコによる福音書は、ここで、狭い意味での「信仰」でなく、イエスへの「信頼」。癒しもなく、言葉だけで「救い」を起こす奇跡でもなく、心と体との全人的なかわり合いが不思議なわざとなっていくことを伝えようとしているのです。

イエスは、自分にすがる女性の願いに気づいていきます。そして、力が抜けるほどの何かを感じました。それほどイエスも痛むのです。女性は癒され、さらに、その女性の存在を捜し、向き合い、言葉をかけようとするのです。群衆がひしめき合うなかで、「その一人」を見つけるのです。弟子たちは、群衆の存在を指摘し、暗にイエスがそこで捜すことを諷めました。「一人」を見ようとしなかったのです。しかし、イエスはそうではなく、「誰か」と声をかけます。そして、「あなたの私への信頼があなたを救った」と救いの宣言を言い渡します。これは身体と精神、そして言葉の相互性なのです。平たくいえば、ここで初めて、心が響き合うのです。イエスと私という関係が躍動するのです。これが、信頼の世界です。命の躍動と人間性の回復がここにあるのです。教育の世界とて同じです。

私は、この女性がイエスの服に触れたという表現、これは、この苦悩を分かって欲しいとの思いを抱いての、握りしめではなかったかと思うのです。あるいは、力なく触れることだけで精一杯だったのではないかと思います。いずれにしても、そこには、踏み込んだ自己表現、必死な思いがあつたに違いありません。

「兎と亀」のお話

演出家で、演劇研究所をもち、演劇創造とともに、障がい者療育にも携わられた、竹内敏晴さんという方がおられました。「言葉」と「体」という視点で、人間の関係性を見つめる方でした。言葉や体を、相互に働きかけるものとして自覚することの大切さを伝え、学校の教師研修にも呼ばれるなど活躍されました。その竹内敏晴さんの『教師のためのからだとこ

とば考』（ちくま学芸文庫）、あるいは『からだが語ることば』（評論社）という著書は、人が人に触れること、人が人に働きかけることの意味など、興味深い視点を私たちに与えてくれます。

『教師のためのからだとことば考』のなかで例え話として、「兎と亀」の歌を教員研修の会合で歌ったときのエピソードが紹介されていました。教員のある会合で、メロディーが流れて、みんなが童心に帰って歌ったのが「兎と亀」で、そこには、和やかな雰囲気があったそうです。そこで、竹内さんが「これ何の歌ですか」と教員に尋ねたところ、そのなかの一人が「ウサギと亀がかっけこして」と答えました。竹内さんは「それ、かっけこの歌ですか」と聞き返します。すると答えがない。そして「この歌の意味を考えたことのある方」と尋ねると一人も手が挙がらなかった。そこで竹内さんは、言葉を喋ってみることを提案します。

「もしもし、亀よ、かめさんよ」これは親しみの言葉でしょうか。むしろ「オイ、こら」と言いたいウサギが、民主的な猫なで声で言っているのではないかと指摘します。次に、「世界のうちで、おまえほど、歩みののろいものはない」は、実験で測った報告のような中立的な言葉であろうか、と尋ねます。すると、皆は、「いや、違う」「へん、なんだおめえ、ドジだなあ」という意味ではないかと答えが返ってくる。さらに、「どうして、そんなにのろいのか」は決定的な侮辱ではないかと議論が進み、ある教員の一人が「これは、ひどい」と言って、皆が笑ったそうです。

2番の歌詞は、かめさんが「何をおっしゃるウサギさん」から始まりますが、これは、「なにを～、という憤慨の思いだ」と。そして「それならお前とかけくらべ」と亀が誘う。しかし、現実には亀がウサギに勝てるわけがない。それでも、亀は語る。教員たちは、「亀はよっぽど頭にきたのだろう」。これが一致した意見となったそうです。

そして、全員がウサギ組と亀組に分かれて、言葉で言い合ってみた。すると、ウサギ組の教員の体が動き始めたと言うのです。あごをしゃくり上げて、軽蔑する者、体を乗り出して冷やかす者、手を口に当てて怒鳴る者など。最後の「どうしてそんなにのろいのか」は憎たらしい大きな声になったそうです。すると今度は、亀組の方の姿勢が変わります。いきなり隣の人の腕を抱え込み、スクラムを組んで、握りこぶしを出すもの、他の人の後ろに隠れて、顔を出し、口をとがらせる人。「なんとおっしゃるウサギさん」の声の迫力はすごかった。「わたし」と言って胸を叩き、指差して「向こうの山」と語る。歌でやり合うと、なかなか凄まじく、阿鼻叫喚とまではいなくても、侮辱と反発のドラマとなったというのです。

竹内さんは、歌うとき、本当の意味で言葉（つまり思い）を感じ取ると、こんなにも体と声が変わる。言葉（人の思い）にははっきりとした行動があるはずだ。それに気づいたとたん、歌う人は直立不動でいられない。手を動かし、足を踏み、呼吸が弾み、声が変わる、というのです。

このように、人の体は言葉（思い）を語る。体と言葉（思い）は不可分なのです。私は、人に触れることは人が人に働きかけ、思いを伝えることだと思いました。

命が響き合う教育

その視点で、このイエスの服をつかむ女性の思い、そしてイエスの力が抜けたという事実、これこそが、真実に出会うということなのだと思います。イエスは女性の思い、ひいては人の重さを感じたのではないのでしょうか。人の人格を含めて命を受けとめ、真摯に向き合ったのです。「力が出て行った」とのイエスの感性のすごさを思うのです。

そして、群衆のなかのその一人をイエスは探し出す。イエスへの信頼をもって服に触れた女性の悲しい思いを受けとめるのです。「愛とは『言葉』である思いと、具体的な体との共振なのだ」と思いました。親が子どもを抱きしめる。保育者が園児を包摂する。あるいは、教育者が、学生と学問を通して人格的なかかわりをなすということにおいても同じ大切な視点があると思います。

私は、新島の唱えた徳育教育、あるいは、良心教育とは、まさに、人間の内面に届き、心を震わせるような力ある言葉で、何かしらの応答性をもたらせていく「人格形成」そのものであったと思うのです。新島は神から託された良心教育に命をかけ、その言葉と生き方に、その時代に生きる多くの人びとが共振呼応し、今の同志社の礎を形作りました。それは、「日本にキリスト教主義学校を建てるための募金」を訴えた、アメリカン・ボードの年会が開かれたラットランドのアピールしかり、1880年に起きた「自責の杖」事件しかりです。

同志社の教育が、教育の現場で語られる言葉が、「一期一会」的な命の出会いをなすような響きをもたらすものとなるように願っています。イエスの「この一人に」という人格的なかかわりを大事にする言葉を紡ぎだしていきたいと願うのです。

2012年5月30日 同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録